「はばたけ千早」講演会レジメ　　2022．5．21

榊原金市

古伊万里を観賞しよう

1．日本の有名な陶器生産地

・日本では陶器は古代から生産されていたが、平安時代以降の有名な生産地は岡山県備前焼、愛知県常滑焼、福井県越前焼、兵庫県丹波焼、滋賀県信楽焼、愛知県瀬戸焼である。これを六古窯と言い現在も陶器・磁器の主要生産地である。

2．日本の磁器開発の経緯

1）安土桃山時代、豊臣秀吉が二度朝鮮出兵するが、九州地区の大名達が朝鮮陶工を連れ帰る。目的は当時の武士の作法として必須であった茶の湯の茶碗製造であった。

2）鍋島藩鍋島直茂は、中国で高価な磁器生産が行われていることを知り、連行した陶工李参平に磁器開発を命じる。

参平は磁石を探して、佐賀県のいたるところの山を歩き、結果、有田町の泉山で磁石を発見し、約１５年程かけて１６１４年、漸く磁器を開発し「陶祖」と言われる。以降、有田町を中心に染付、色絵など各種の磁器の生産が開始される。

3．日本の磁器生産

1）初期伊万里：磁器生産の初期の製品で、技術が未熟なため、分厚く、絵付けも稚拙でおおらかさがある。生産された数が少なく貴重品である。

2）染付：藍色の絵付け磁器。色が藍染に似ていることからこの名前が着いた。美しい藍色と白色が特徴。欧州では「ホワイト＆ブルー」と人気を博し、中国では「青華」と呼ばれた。

3）九谷焼：独特の色使いで器全面を青、緑、紺で塗り尽くす絵付け法。赤を使用しない絵付けは「青手」と言われる。

後程、赤を使用する「赤九谷」も開発される。

当初は、石川県で独自に開発生産されたと考えられていたが、近年、有田町で九谷焼仕様の窯と捨て場が発見され、当初から有田で開発生産されたものであると判明した。

4）鍋島様式：鍋島直茂は絵付けの精細巧緻な高級色絵磁器を生産し、将軍、天皇、大名に進物贈呈し、自藩の地位向上に努めた。

製法を秘密にするため陶工を現在の佐賀県有田町の窯場に幽閉した。一旦、窯場に連れ込まれた陶工は、製造秘密遵守のため生涯窯場から出ることを禁じられた。

4．日本の磁器輸出

1）１６～１７世紀になると、世界一周の航路が発見され、欧州各国（オランダ、英国、

ドイツ、フランスなど）は東南アジアに植民地と香料を求めて航海する。
オランダは、いち早くインドに「東インド会社」を設立し、東南アジア諸国と貿易を開始する。特に、中国の白く美しい磁器に目をつけ、それを買い付け欧州各国の国王に販売した。欧州では「白い宝石」と呼ばれ、絶賛され、高価で「金と同価格」と言われたが、欧州各国王は魅力に捕らわれ競って購入した。

2）１６４４年、中国明国が滅亡し、景徳鎮窯場の磁器生産が中止する。オランダは磁器生産が開始された日本に着目し、中国磁器の代替え生産を指導依頼する。
１６４７年から有田の磁器の輸出が開始され、以後約１００年間で約３００万個輸出された。

3）日本の欧州好評磁器
①染付：大型壺、皿など。中国磁器の模様の「写し」の山水風景、唐人、吉祥紋柘榴など描かれた。
②色絵・金襴手：カラフルなものが色絵、金色が追加されると金襴手と言われる。
大型壺、大型皿など。実用品ではなく装飾展示に使用された。
③柿右衛門様式：柿右衛門が、中国製品と異なる色絵模様を独自開発した。
色の綺麗さと白色の余白美が欧州で大人気となる。大型壺、蓋付鉢、皿など。

4）しかしながら、やがて、中国の新しい清国が磁器生産・輸出を開始し、景徳鎮で磁器生産が再開されると、価格面で勝てなくなり日本製磁器の輸出が途絶える。

5．欧州の古伊万里

1）１７世紀、ザクセン公国（現在のドイツ）国王アウグスト１世は、東洋磁器の熱狂的な収集家で、特に柿右衛門の激愛家で有名だった。
自分の宮殿に「磁器の間」を作り、部屋一杯に磁器製品を展示した。有田の染付壺・皿、柿右衛門壺・皿が現在も宮殿内に沢山残されている。

2）アウグスト王は、高価な東洋磁器が財政を圧迫したので、自国生産を考え、錬金術師のベドガーに磁器開発を命令し、宮殿内地下実験場に幽閉する。
ベドガーは１７１０年、とうとう磁器開発に成功し、アウグスト王は磁器の生産を開始する。これが現在の「マイセン窯」である。

6．国内需要開拓時代

1）輸出が止まった有田の磁器生産者たちは、国内販売への移行を考える。
やがて元禄、文化・文政と庶民繁栄の時代を迎え、磁器の需要が増加する。

2）色絵、金襴手の高級磁器は公卿、大名用に主に販売され、簡素で安価な色絵、染付の製品は一般庶民の日用品として生産された。
こうして、日本国内にもそれまでの食器類が陶器から磁器へと代わり、普及していった。

以上